ダイバーシティ推進室からのお知らせ

専門相談（ワーク・ライフ・バランス相談・女性の健康相談）が完全申込み制に変わりました。

相談の申込みを受け付け後、専門相談の相談員と日程調整して相談日時と場所を決定します。相談をご希望の方は随時ダイバーシティ推進室までご連絡ください。

・ワーク・ライフ・バランス相談員
キャリアコンサルタント技能士　荻野令子
社会保険労務士・ファイナンシャルプランナー　伊東文子

・女性の健康相談員
助産師　長濱博子
助産師　嶋村克子

ダイバーシティ推進室の新メンバーを紹介します。

推進室長	都市教養学部 経営学系 教授	村田啓子
女性研究者支援担当	特任研究員	中山尚子
文化的多様性を持つ構成員支援担当	特任研究員	藤山　新

今後ともダイバーシティ推進室を
よろしくお願いいたします。

新任特任研究員からひと言

4月からダイバーシティ推進室に着任いたしました中山です。住み慣れた関西を離れ、初めての東京生活となり、新しい環境のもと新鮮な気持ちで日々過ごしております。研究生活も含めるとこれまで 10 年あまり、大学という場所に関わってきたことになります。

「男女共同参画（gender equality）」や、「ワーク・ライフ・バランス」という用語が大学でもよく聞かれるようになってどれくらい経つでしょうか。一昔前に比べると耳慣れた感じはいたしますし、それらは先達の切り拓いてきた苦労の道筋だと思っています。しかしそれは、ある程度を達成できればそれで十分、という安穏としたものではなさそうです。それらの視点に立った上で、ひとりひとりの抱える困難をいかに受けとめるか、どのようにサポートしていくのか、それぞれの課題に沿って一歩一歩進めていくべき道だと考えますし、「ダイバーシティ」推進ということばは、様々な立場・状況にある個人の尊重という意味でその鍵となるのではないかと思いながら、取り組んでまいります。

本学の皆様にとって身近なダイバーシティ推進室になればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

今年度よりダイバーシティ推進室に着任いたしました藤山です。これまで、男女共同参画センターなどでの勤務を通じて、男女共同参画社会の推進に向けて取り組んできました。また、研究者としては日本スポーツとジェンダー学会に所属し、現在では主にセクシュアル・マイノリティとスポーツの関係について、実態調査や各国でのガイドラインの制定状況などを調べることを通じ、公平なスポーツ参加のあり方とはどのように構想されうるのかについて検討しています。

ダイバーシティ推進室での業務にあたっては、これまでの経験を生かすとともに、大学という大きな組織固有の課題や、若い世代特有の課題（何しろ男女共同参画センターの利用者は、平均年齢が高いのです…）についても対応できるよう知見を広げ、信頼される室員の一人になりたいと考えています。

相談や悩みがある方はもちろんですが、例えば男女共同参画社会について知りたい方や、スポーツとジェンダーに関して興味のある方など、学生、教職員を問わず、どうぞ気軽にダイバーシティ推進室においでください。

今後の予定

◆10月「首都大学東京女性大学院生研究奨励賞」表彰式を開催します。

本年度より、女性大学院生の意欲的な研究活動を奨励し、継続的に研究に取り組む動機づけとしてもらうことを目的として、「首都大学東京女性大学院生研究奨励賞」が創設されました。選考は現在、第二次審査へと進んでおり、10 月末に予定する公開の表彰式において、受賞者によるプレゼンテーションを行っていただきます。受賞者の発表および日時・会場等詳細は WEB サイト等に掲載しますのでご覧ください。

◆10月~「外国籍教職員と日本人教職員との交流会」
◆11月8日「手話イベント」
◆11月「バリアフリー講習会」
◆11月「セクシュアル・マイノリティ講演会」
◆12月「女性リーダー育成のためのフォーラム」

詳細が決まり次第、ダイバーシティ推進室 WEB サイトでお知らせします。

□■ごあいさつ□■

8月末日をもって退職しました。皆様のご協力のお蔭で一時保育施設の開設をはじめ、様々な事業を進めることができました。ありがとうございました。（太田）

9月末をもって退職しました。障がいのある学生支援制度の施行や各種講習会の開催等、皆様のご協力で進めてまいりました。ありがとうございました。（塚本）

首都大学東京　ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1　図書館本館 1 階
電話：042-677-1337（直通）／内線 2571　FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：平成 27 年 9 月 30 日
編集・発行

No.12 September 2015

Newsletter ダイバーシティ通信

首都大学東京 TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

ダイバーシティの推進に向けて

Contents

1 ダイバーシティの推進に向けて「本学のダイバーシティ推進の課題」
2 「ダイバーシティ推進室 WEBサイトをリニューアルしました！」
講習会「手話講習会」
3 第 1 回バリアフリー講習会「点字の世界」
東京理系女子探検プロジェクト2015　「理系女子のためのインフォメーションセンター」
4 ダイバーシティ推進室からのお知らせ
新任特任研究員からひと言
今後の予定

平成 27 年度から新たにダイバーシティ推進委員長に就任した山下副学長より、「本学のダイバーシティ推進の課題」をテーマとした、以下のメッセージが届きました。

本学のダイバーシティ推進の課題　ダイバーシティ推進委員長 山下 英明

本学は、性別、障がいの有無、文化的相違などにかかわらず、多様な人材が大学のあらゆる場における活動に同様に参加し、等しく尊重されるよう、これまで男女共同参画推進、障がいのある構成員支援、文化的多様性を持つ構成員支援などのダイバーシティ推進活動を実行してきました。本稿では、本学のこれまでの活動を振り返りながら、今後の課題を示します。

男女共同参画推進では、主に女性研究者が研究、教育を行う際の障害を取り除くための支援を行ってきました。「ワーク・ライフ・バランス実現のための研究支援制度」は、出産・育児・介護のために十分な研究時間を確保できない研究者に対して、研究業務と教育業務を支援する「支援員」を雇用するものです。今後は、支援対象や方法を検証し、多様化するニーズに対応しうる、より効果的な制度になるよう検討が必要です。また、昨年度開設した「一時保育施設」については、周知方法や利便性の改善方策を検討し、利用者拡大に向けた取組みを実施していきたと思います。以上のような両立支援の取組みのほかに、女性研究者からリーダーを育成することも重要です。そのため、人物、学識の優れた女性教授がメンターとして女性研究者をサポートする制度や、分野を越えた女性研究者ネットワークの活用拡大もめざしたいと考えています。一方、女性大学院生の意欲的な研究活動を奨励し、継続的に研究に取組む動機づけとする目的で、本年度新たに「女性大学院生研究奨励賞」を創設しました。今後は、審査プロセスや受賞者のその後のキャリアなどを検証し、女性研究者の育成に資する取組みとなるよう継続的に見直しを行いたいと思います。

障がいのある構成員支援では、平成 26 年 4 月から「障がいのある学生支援制度」をスタートさせ、本学に在籍する障がい学生への個別支援を行ってきました。学生の障がいの特性等により必要となる合理的配慮が異なるため、現在は在学中の障がい学生への支援を行うことで精一杯の状況です。しかし、いわゆる「障害者差別解消法」が平成 28 年 4 月から施行されるに伴い、国公立の大学等では障がい者への差別的取扱いの禁止と合理的配慮の提供が法的義務となるため、本学においても今後は常時障がい学生を受け入れられるよう、様々な障がいをもつ学生に対する全学的支援体制を整備し、公表していく必要があります。また、発達障がいのある学生の支援については、各学生の相談を中心に行っていますが、国内外の大学の先進的取組み事例を学び、より多様な支援を検討することが不可欠です。

文化的多様性を持つ構成員支援では、これまで外国籍教職員同士、外国籍教職員と日本人教職員との交流会の開催、「外国籍教職員向け困ったときのお役立ち情報」の WEB 公開などを実施してきました。今後は、外国籍教職員の増加が予想されることから、学内の文書や掲示物への外国語の併記、外国籍教職員向けの相談窓口の設置などの対応が急務です。

最後に、ダイバーシティ推進に最も重要なことは、構成員のダイバーシティに対する理解であると考えます。我々がもつ固定観念によって女性が大学で活動する障害になっていないでしょうか。障がい学生に対する合理的配慮を提供することに消極的になっていないでしょうか。また、セクシュアル・マイノリティ当事者と接する際に留意するべき事柄について十分理解しているでしょうか。構成員全員がこのような理解を深めれば、ダイバーシティ推進の大半は達成したといっても過言ではありません。すべての構成員の方にご理解、ご協力をいただけるよう、今後もダイバーシティ推進室は啓発活動を進めて参ります。

本稿を執筆するにあたり、ダイバーシティ推進室専任スタッフの太田恭子氏、塚本鶴樹氏、中山尚子氏、藤山新氏には多大なご協力、ご助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。

ダイバーシティ推進室 WEB サイトをリニューアルしました！

ダイバーシティ推進室では、WEB サイトを通じた情報発信を行っています。このたび、より使いやすいサイトをめざして、一部リニューアルを行いました。

1. 文化的多様性を持つ構成員支援のページ公開

国籍・民族・言語等の文化的多様性を持つ構成員が、教育・研究の場において十分に能力を発揮できる環境づくりの一環として、新たに「文化的多様性を持つ構成員支援」のページを公開しました。

このページでは、外国籍の教職員が本学で働く際に必要な学内外での手続きや、交通機関、医療関係、相談機関など、日常的な生活に関する情報を「外国籍教職員向け困ったときのお役立ち情報」としてとりまとめ、学内外のサイトへリンクしています。また、この春に作成された南大沢キャンパス危機管理マニュアル（携帯版）の英語版 PDF ファイルへもリンクしており、直接プリントアウトできるようになっています。

2.「障がいのある構成員支援」のページリニューアル

ダイバーシティ推進室は、本学における障がいのある構成員に関わる総合窓口となっています。この点を踏まえ、必要な情報にアクセスしやすいようにサイトを再構築するとともに、いくつかの情報を追加しました。首都大学東京において行われている障がいのある学生支援についてまとめた PDF ファイルへのリンクをはじめ、バリアフリー講習会や手話講習会など、これまでダイバーシティ推進室が行ってきた講習会の報告、支援相談の案内などの情報を掲載しています。

3. 南大沢キャンパス「だれでもトイレマップ」を公開

南大沢キャンパスには、車いす対応型、オストメイト対応設備、おむつ交換台の設置など、さまざまな機能を持った「だれでもトイレ」が 40 箇所以上に設置されています。その場所と機能をキャンパスマップ上に表示した「だれでもトイレマップ」を公開し、どこにどのような機能を持つトイレがあるのかがわかりやすくなるようにしました。また、日野、荒川キャンパスについても、同様のマップを作成し、公開しています。

4. 首都大学東京一時保育施設のページを公開

平成 27 年 3 月 16 日に、京王相模原線南大沢駅近くに首都大学東京一時保育施設がオープンしました。これにあわせて、一時保育施設の概要や利用方法をまとめた「首都大学東京一時保育施設」のページを公開しました。7 月からは保育スタッフが作成している「園だより」も掲載しています。本学の学部生、大学院生、教職員の利用をお待ちしています。

今後も、より使いやすく、より有用な情報を提供するサイトを目指し、情報のアップデートや、さらなるサイトの改良に取り組んでまいります。みなさまからのご意見をお待ちしております。

手話講習会

2015 年度の手話講習会は、5 月 14 日から 7 月 16 日の毎週木曜日、南大沢キャンパス図書館本館 プレゼンテーションルームにて、講師として笠原はま子氏（八王子市聴覚障害者協会）、通訳には金榮眞美氏（八王子市手話通訳協力者の会）を迎えて、全 10 回で開催されました。最終回には、佐野幹子氏、青木義郎氏、汐崎正美氏（八王子市聴覚障害者協会）にも加わっていただいて交流会を行いました。

初回は講義形式主体で、実習が少なめでしたが、その他の回は短い講義や手話を使っての歌を唄ったほかは、すべて実習で実践力を養いました。内容は、挨拶、自己紹介、指文字、家族、数、趣味、仕事、曜日、時、都道府県、天気等に関する手話表現で、これらを学習後、最終回の交流会でグループ毎に手話での会話を実践しました。受講した学生も非常に熱心で、前回までの内容を身につけて次の講習に臨んでいました。そして、最終回の交流会では、講師の方々の巧みさもあったと思いますが、グループ毎に手話での会話が熱心に続けられていました。

アンケートから、本当に楽しかった。たった 10 回でも、簡単なお話しができるようになって聾者のかたと通じ合った時はすごくうれしかった、これからも勉強を続けたい。非常に勉強になった、続きを是非やりたい。実際に聾者と会話できる機会が設けられているのはとても良い経験になった。とても面白かった。手話に興味を持つ人がもっと増えてこのような講習会がもっと行われるといいと思う等の前向きな感想が寄せられました。

ダイバーシティ推進室が手話講習会を企画、運営するようになって 3 年目になりました。もともと手話講習会は、2002 年度都立大学時代の教務課による企画、運営で始まり、学生課に引き継がれた後に 2013 年度からダイバーシティ推進室が行っています。手話が「障がいのある構成員支援」に関わるものであることから、自然に引き継がれてきたことはもちろんですが、この講習会の受講者から障がいのある学生支援スタッフに登録してくれる学生が出てくることへの期待もあります。幸い期待に応えてくれる学生が出てきてくれていて、ダイバーシティ推進室としても非常にありがたいと思っています。

かつては、前期と後期それぞれ講習会を実施していた時期もあったようですが、現在は前期と後期を隔年で開催できるようにしています。また、講習会終了後のアンケートでは、初心者向け講習を終えた後の初級・中級者向けの講習会への要望が寄せられているため、その対応も検討すべき時期かと考えています。今後も、たくさんの人に受講して欲しいと思っています。

第 1 回バリアフリー講習会 「点字の世界」

2015 年 7 月 23 日（木）南大沢キャンパス図書館本館プレゼンテーションルームにおいて、今年度第 1 回バリアフリー講習会「点字の世界」が開催されました。講師には、視覚に障がいのあるご自身の体験と視覚特別支援学校での教育経験を通して「さわることの意味」を深く考えるようになり、「さわって広げる世界」の活動を行っていらっしゃいます全国高等学校長協会入試点訳事業部専務理事の高村明良氏をお迎えしました。

簡単にご紹介します。まず、点字についてです。現在使われているのは 6 点点字で、1824 年にフランスのルイ・ブライユが考案し、2×3 の 6 点で表せるようにしました。日本には 1880 年代に伝わり、石川倉次が日本語 6 点点字を考案しました。点字は、仮名文字のみであり、漢字の点字はありません。

点字は 1 秒間に 5 文字くらいずつ読みますが、意味を取るのは難しく、どこで区切りをつけるかが大切です。また、音読は比較的やさしいのですが、読みながら意味をとるには練習が必要です。

試験等では 1.5 倍の時間を確保することになっていますが、読む量が増えていることもあり、実際はそれでは足りません。しかし、それ以上に時間延長すると体力がもたなくなります。

点字器や点字盤で一つずつ点を作るときは凹を作り、裏返して凸を読むため、左右対称に作る必要があります。書く点字と読む点字が頭の中にあるのです。一文字ずつ点字が打てるアメリカのパーキンス盲学校の点字タイプライターは、横一列に 6 キーが並んでいて、それで 2×3 列の点字を打つもので、日本でも 1980、90 年代まで主流でした。その後、PC と点字プリンタによる入力と出力が開発され、PC キーボードのＳＤＦＪＫＬキーを使って入力するようになりました。さらに、点訳ソフトが開発されて楽になり、大量の印刷も可能になって点字タイプは、ほぼ無くなりました。

それでは、さわると見るとで、どう違うのでしょうか。例えば立方体では、一度に見るには 3 面が理論的に限度ですが、さわった場合、一度に 6 面全てさわれます。通常視覚優位の世界にいる人の立方体イメージは、見えている 3 面から全体を作っていますが、視覚障がい者の場合、常に 6 面にさわっているイメージになります。このことは、立方体を点図（図形を見たままのイメージで点で表したもの）などで表記しても、さわってもわからないということでもあるのです。

実生活の点字ですが、手や指の機能から見ると駅の手すり点字表記は、少し回転させて貼った方が読みやすくなります。券売機も直立したものが普通ですが、点字表示をさわるためには斜めになっていた方がよいです。最近斜めになったものが出てきました。ヨーロッパの教会で山型の案内板を見たことがあります。手前の面に視覚で読むための案内があり、向こう側の面に点字でさわって読むための案内がありました。3D プリンタの普及によりさわれる立体が簡単にできるようになりました。また最近、さわった感触の復元ができるようになりました。これらの普及等を通して、視覚に障がいのある人の世界も広がっていってほしいと思います。

直接、支援方法を学んだわけではありませんが、支援について考えさせられ、点字やさわる世界に引き込まれた講習会でした。

東京理系女子探検プロジェクト 2015 「理系女子のためのインフォメーションセンター」

ダイバーシティ推進室では、昨年度に引き続き、7 月 19 日、8 月 16 日に南大沢キャンパスで開催された大学説明会において、理系への進路選択を考えている女子中高生や保護者を対象に、理系女子向けの様々な情報を提供する「理系女子のためのインフォメーションセンター」を開設しました。

女性研究者および理系の女子学生が非常に少ないという日本の現状を示す資料をまとめた『なぜ今、理系女子？』（2015 年版）を作成し、参加者に配布するとともに、そこに掲載したデータを黒板に掲示し、国をあげて理系をめざす女子中高生を応援していることを伝えました。

さらに、日本ロレアル株式会社が全国の大学・大学院の理系分野に在籍する女性と全国の理系出身の女性社会人の “ホンネ” を聞くために実施した「インターネット調査」の結果を掲示したほか、2006 年に文部科学省が、理系に進学し卒業後様々な方面で活躍している 8 人の女性たちの姿を映像化した DVD“理系に行こう！”―You can do anything―（都河明子監修）を上映し、理系に進んだ女性たちについての情報を提供しました。

また、理系といっても具体的にどの方面に進んだらいいのか、などの疑問に対する資料として、理系女子のための参考図書および『Rikejo』26 ～ 30 号（講談社）のほか、ロールモデル集『未来を拓く首都大学東京の女性研究者たち』、ロールモデル集『都市環境を創造する女性たち：卒業生の働き方事例集』、『首都大学東京　大学案内 2016』を展示するとともに、さらに、本学の理系 4 学部・系の女子学部卒業生、女子大学院修了生それぞれの進路状況についてのデータをグラフにして掲示しました。

そして、本学の理系分野の中でとくに興味が湧いた方面があれば、その方面の詳細な情報を獲得できるように、本学の理系分野である都市教養学部理工学系、都市環境学部、システムデザイン学部が実施する女子学生による学生生活の紹介や個別相談会のチラシの配布を行いました。

インフォメーションセンターということで、開設時間内はひっきりなしに参加者が訪れ、DVD 上映や掲示資料、閲覧資料をじっくり観たり、読んだりしている高校生や保護者の姿が見られました。

アンケートから、女性が少ない理系分野でやっていけるのか、どのような職に就けるのか、といった不安の声とともに、資料が豊富で参考になった、Rikejo の内容が面白かった、学校にはこのような本がなかったのでもっと読んで理系の興味を深めたいと思った、ビデオを見て“理系”といってもたくさんの分野があることを改めて思った、理系女子は文系に比べてまだまだ少ないとよく聞くが社会の受入れ状況などもだいぶ整ってきたのかなと思った、等の感想が寄せられました。